

アフロサッカー

2006(平成18)年6月24日鑑賞(ホクテンザ1)



監督=ソムチン・スイースパープ/出演=ポンパット・ワチラバンジョン/サムリット・マイケルセーン/カーン・ジャンノーイ/コムサン・スイーターントー (アートポート配給/2004年タイ映画/103分)

……タイ南部からマレーシアにかけての森に住むサガイ族のサッカーチームが、バンコクで開催される国王杯のゲームに出場。その目的は、優勝し、サガイ族を今襲っている謎の疫病から救ってくれると信じられている優勝カップを手に入れること。そんなチームの監督は、サッカー賭博の八百長試合でヤクザに追われているパオトゥー。野性味あふれる裸足のサッカーで、果たして彼らはエリートチームに勝てるのだろうか……？ W杯で日本が1次リーグ敗退を決めた直後に、こんな映画を観たのも何だか皮肉……。もし、サガイ族の技術がサムライブルーのチームに伝授されていれば……？

「サムライブルー」騒動をどう見るか……？

日本人は熱しやすく冷めやすい民族だということを、私は今回のW杯「サムライブルー」へのマスコミあげての応援ぶりを見て、つくづく思い知らされた。根っからの阪神タイガースファンは昔から数多いし、それはそれでいいのだが、バカバカしいと思うのは、優勝が近づいてくると「にわか阪神タイガースファン」が増殖すること……。それと同じように、いやそれ以上に、普段は「サッカーなんか興味ないよ」という感じのマスコミ人たちが、W杯が近づくとにわかサッカーファンになってしまう。その傾向がとりわけ顕著なのが、アホバカバラエティーのアナウンサーやレギュラー出演者たち。とにかく、サッカーネタで盛り上げなければと思うのだろうが、その「バカども」がそこで言うセリフはいつも同じ……。

全く同感！ 曾野綾子の主張……

こんなバカバカしいサムライブルー騒動を苦々しく思っていた私は、6月23日（金）に報道された日本チームの第1次リーグ敗退を冷静に受け止めたが、その直後、わが意を得たりとばかりにハタとひざを打ったのが、6月26日（月）付産経新聞にあった曾野綾子の「青いシャツと大東亜戦争 冷厳な事実を直視せよ」（「透明な歳月の光」209）という記事。そこには「こういう浮ついた熱狂を見るのは今度が初めてではない。戦争中に見なれた反応と言葉遣いとそっくりであった」との主張が……。まさにそのとおり。さらに「サッカーファンたちは『奇蹟を起こす』とか、『必ず勝ちます』とか言って青いシャツを身につけて大勢で氣勢を上げた。『大東亜戦争』当時、『決戦の時には必ず神風が吹く』と言った大新聞や国民の表情とそっくりだった」の主張もそのとおり。このように、日本のマスコミのレベルの低さをきちんと指摘する主張が、もっともっと増えてほしいものだが……。

サガイ族とその運動能力

サガイ族は、タイ南部からマレーシアにかけての森に住む少数民族。その身体的特徴は、背が低く、肌が黒く、縮れ毛。その詳細はパンフレットで勉強してほしいが、面白いのは、裸足でやるサッカーにおける運動能力。足が速い、動きが俊敏、パス回しがうまいなど、一般的な誉め言葉だけでは到底表現できない、アクロバットのなボールさばきはまさに神ワザ的……。連日テレビで放映されるW杯のどのチームよりも、こいつらサガイ族のチームの方がボールさばきがうまいのでは……？

主人公は一クセも二クセも……

この映画の主人公は、元サッカー審判のパオトゥー（ポンパット・ワチラバンジョン）。『トゥー・フォー・ザ・マネー』（05年）は、アメリカンフットボールの賭博を描いた面白い映画だったが、タイ王国においても、サッカーの試合には賭博がつきもの……。そして、賭博には八百長もつきもの……。？

パオトゥーはサッカー賭博の八百長試合でヘマをやらかしたため、今はヤクザに追われる羽目に……。映画の冒頭は、ヤクザの追及から必死で逃れようとするパオトゥーの姿が描かれる。そんなパオトゥーが見たのは、裸足でサッカーの大会に出場していたマムアン（サムリット・マイケルセーン）らのチーム。その動きを見たパオトゥーは直ちにサッカーチームの結成を決心して、サガイ族が生活しているタイ南部へ。そこでパオトゥーが見たサガイ族の暮らしとは？ そして、パオトゥーが持ち込んだサッカーチーム結成を、彼らがオーケーした理由とは……？

実力は抜群だが……？

パオトゥーが監督兼マネージャーとなって、サガイ族の若者たちで結成したチーム「サガイ・ユナイテッド」の目標はただ1つ。バンコクで開催される国王杯に出場して、優勝カップを手に入れること。この「優勝カップ」をサガイ族の部落に持ち帰れば、現在サガイ族が苦しんでいる原因不明の疫病から逃れることができると思っているからだ。

密林からタイの首都バンコクに遠征してきた「サガイ・ユナイテッド」のイレブンたちが生活するのは、廃墟ビルの中。そこはたちまち、ターザンのような若者たちが寝起きする場所となったが、日本のサムライブルーと違って、次々と予選リーグを勝ち進んでいく彼らには、マスコミの取材が次々と……。マネージャーとして利益の9割をピンはねしている(?)パオトゥーは、その対応に大わらわだが……。

都会の誘惑はコワイよ……

私は2002年のGW中に1度だけ、タイのバンコクなどを「大名旅行」したことがある。バンコクの「歓楽街ぶり」はそりゃすごいもので、新宿歌舞伎町の比ではない……？ 不良中年の私ですらそう思うのだから、11名の若者たちがそんな都会の誘惑に負けるのも仕方がないというもの……？ 特にやっかいなのは、ドラッグを覚えその中毒になったため、お化けの幻覚と闘わなければならなくなったマイパイ（カーン・ジャンノイ）。そして、女好き（エッチ好き？）で、自分が世界で1番ハンサムだと信じているガスー（コムサン・スィーターントー）

の2人。もともとこのチームは、サガイ族の族長の息子でキャプテンのママアンが核となったチームだったが、このように「都会の悪」に染まっていく奴らが出てくると、チームのタガが緩み、時に腑抜け状態に……。ホントに「都会の誘惑」はコワイもの……？

リーグ優勝に向けた八百長はあるの……？

この映画には、八百長バクチでパオトゥーに裏切られた胴元のヤクザが登場するが、パオトゥー監督率いる「サガイ・ユナイテッド」チームのマスコミへの露出が強まる中、当然ブラウン管に映るパオトゥーの姿が彼らに発見され、パオトゥーは窮地に……。そして、今や「国王杯優勝まちがいなし」という状況の中、一発思いきった八百長をすれば、すなわちわざと負ければ、パオトゥーの過去の負債はすべてチャラにするという提案が……。果たしてそんな誘惑にパオトゥーは乗っていくのだろうか……？ それとも、疫病から部族を救いたいというサガイ族の純真な願いに忠実に動くのだろうか……？

プラスαが面白いよ

決勝戦の行方がどうなるのか、それはあなたのご想像におまかせするが、結果的に再度、八百長の期待を裏切ることになったパオトゥーは、再びヤクザたちの追及にさらされることに……。この映画は、そんなラストにおけるプラスαストーリー(?)が面白いのでそれに注目！

私は2004年11月の中国雲南省旅行の際に「クビ長族」の少女たちを見たことがある。これは子供の時から首に首輪をつけ、その幅を少しずつ大きくしていくことによって、徐々に首を長くしていくもので、ホントに実在する少数民族。スクリーン上には突然そんなクビ長族の少女たちがサッカーボールで遊ぶシーンが登場。こりゃ一体ナニ……？ 今までのストーリーと何の脈絡もないシーンに一瞬ビックリ……。

すると、そこに突然登場したのが、パオトゥー。つまり、ヤクザからの追及を逃れたパオトゥーは、今度はこのクビ長族の女の子たちの新チームで……？

2006(平成18)年6月26日記